

随想



堀内康人

どうしたことか最近になって、しきりに、若い頃読んだ多くの詩人たちの詩の一ひら一ひらが秋の木の葉が散るように頭の中に舞い落ちて来て、そうでもう一度しっかり読み返して見よう、などと思うようになった。ソビエトの有名な詩人が、ガスをくわえて自殺した、それは若者の間に人気があった、エセーニンであった、彼は長い詩の最後に、「生きることはいとやすきこと、死することはいとかたきこと」と結んで死んだ。そのエセーニンの死をいたみ、これまた有名な詩人、マヤコフスキーは、長い詩をかいいて、その詩の最後に「遊星はまだ仕上げが足りぬ、死することはいとやすきこと、生きることはいとかたきこと」と結んだ。

十二月九日の夕刊に、体が弱く、学校がいやになった十二歳の男の子が、明るい、にぎやかな性格であったが、洋服ダ

ンスの取手にタオルを結んで自殺をしたことが報ぜられた。日本では老人の自殺はいうにおよばず、青年そして近頃はこうして子どもまでが、自分の生命を自分で絶つことが珍らしくなくなった。まさに日本の現実には自殺的環境である。私はマヤコフスキーの詩の断片を想い起し、そして幼い子どもたちを教育する人たちを目に浮べながら、こんなことを考えている。

何十億という人類が生きている地球という遊星は、何百年何千年ではなく、十年二十年という近い将来、どうなることであろうかということがあらゆる面で心配されている。幼児教育にたずさわっている人なら、エレン・ケイがいった「児童の世紀」という言葉は誰一人として知らぬ人はいない。けれどどうなるとなにが一体児童の世紀なのか問い直す必要は

ないだろうか。子ども子ども一点張りではなく、大人も生きることのむずかしい世の中が、もうそのへんまでやって来ているのである。西洋優位の終幕を見通し、中国が世界の基軸になるであろうと、いつて死んでいったトインビーがどうして、そんな結論に至ったのか、地球上の文明の崩壊をくいどめるものはなんなのかを考える必要はないだろうか。そうしたことを考えながら、幼児の教育を考え直すことの必要性を大切にしたいのである。幼児は遊びの中で、その心身を発達させて行くことは誰も否定できないが、この世界は遊びの楽

しさだけでは崩壊してしまうので、子どもも大人もいっしょになって宇宙を發展させなければならぬことを、どのようにして子どもに知らせていったら良いのか、その具体的プログラムが、日常の保育にどんな形で組み込まれているかを真剣に考える時がやって来ているように思うのである。金魚鉢の金魚の水をかえ、餌を与えて世話をすることも結構、しかし子どもが足をおろしている大地の下でミミズはその細長い体の何百倍もの土をたべながら、草木の育つ土壌を目に見えない所で耕し、草木は大地に根を張り、バサバサかゝるをがっ

ちりと結びつけていること、赤い鳥小鳥を歌いながら、鳥と木の実の自然がどんなに調和的にその生命活動を發展させているかということ、蝶ちよ蝶ちよ菜の葉にとまれを歌いながら、この可憐な虫と菜の花の一生が、いわば生活上の同盟でもあることへの認識をどのように感動的に与えることができるであろうかということ、など……は、ただ子どもの遊びを楽しく展開させればそれでよいのだという考えとは次元のちがうことであるように思われるのである。

間違つて教育された大人たちは、自分たちの楽しさだけを追い求め、自然を破壊しそのむくいが自分たちの生命活動を困難におとし入れていることによく気づいて来ている。マヤコフスキーの歌ったように「遊星はまだ仕上げが足りない」「生きることは死ぬことよりもむずかしい」、それを子どもで次の元では、自然は人間をふくめて調和的といふなみの中で生きて行くのだということを、人間の文明社会と結びつけて、もっとも強く感じとらせていけないものだろうか。

(東京家政大学)